エルフの村に
召喚された貴方が
姫巫女にいっぱい甘やかされる話

宝樹ユグドラシル。
悪しき心を持つ邪悪な人間たちから
エルフの森を守る守護樹。

宝樹の生み出す結界によって
森の平穏は保たれているが、
結界を維持するためには強い魔力を持つ
「宝樹の守り手」が必要なのだ。

ユグドラシルは数百年に一度、
どこからともなく宝樹の守り手を召喚し、
森に住むエルフたちは宝樹の守り手を
ユグドラシルの現身として奉るのだ。

社会人生活が始まって数年が経過。

慌ただしい日々を必死に過ごしているうちに、
少しずつストレスが蓄積し、
精神は擦り切れてしまった貴方。

ある日目覚めるとそこは見知らぬ場所で、
目の前には金髪の美少女が傅いていたのだった――。

お待ちしておりました、宝樹の守り手様

ハアアアアア

私は貴方様にお仕えするために遣わされたエルフの聖巫セルリアです

貴女様のために誠心誠意ご奉仕させていただきますね。

なんでも、貴方様のなさりたいことをお申し付けください。

…え？
つらい思いをしてきたから
いっぱい甘えたい？

ふふ…承知いたしました
それでは私めが
精一杯甘やかして差し上げますね♡

セルリア

宝樹ユグドラシルを奉るエルフたちの
中で儀式を執り行う聖巫。
ユグドラシルの化身である貴方に
着き従い、文字通りどんなことでも
してくれる。
現代社会に疲れ果てた貴方は
彼女に癒しを求める。
そんな貴方にセルリアは
聖巫としての役割以上に、
貴方を愛おしく感じることに
なるのだった。

「それではおちんぽ様にご奉仕いたしますね。」
「まずはこのしょんぼりおちんぽ様を
元気にするところからですね。」

「やさしく…なでなで、なでなで…。」
「なでなで…なでなで…あっ！
おおきくなってきましたよ♡」

「なななで…なななで…ふふ、御立派です♡
なななで、びくびく震えていらっしゃいますわ。」
「もどかしいのですか？
ふふ、切なそうなお顔をされていますね。
気持ち良いのですね♡」

「まあ、もうおチンポ様がビンビンに勃ってしまわれましたわ♡優しく撫でられるのが興奮するのですね。」
「さきっぽのほうと、くびれた部分を…なでなで、なでなで…。」

「あっ…あら？　もう達してしまわれるのですか？」
「わかりました、いっぱい気持ちよくなってくださいましね♡」

「はぁーい、
ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーーっ……。」

「うふふ、たくさん出ましたね♡
気持ちよくなっていただけましたか？」

「うふふ、それでは私の口でお慰めしますね♡」

「まずはご挨拶のキスを……ちゅ♡」

「ふふ、御立派ですわよ♡
ご奉仕しているのは私ですのに、
すごくいやらしい気分になってしまいます♡」

「まずは私の舌でぺろぺろさせていただきますわね♪」

「ん…れろ…ぴちゃ、れろ…れろ…。」

「あっ、びくんと跳ねました！ お気持ち良いのですね♡
ああ、恥ずかしがらないでください…♡」
「どうぞいっぱい気持ちよくなってくださいませ♡」

「あー……ん。」

「ん…じゅっ……じゅっ、じゅっ、じゅっ…ちゅぱっ…。」
「ああ…
なんていやらしいカタチをしておられるのでしょう…♡」

「じゅっ、じゅっ、じゅっ、んぱっ、じゅっ、じゅっ…ぷぁっ…。」

「あら？　おちんぽ様がビクビクしてきましたわ。
…え？　気持ち良すぎてもう出ちゃいそう？」
「ふふ、大丈夫ですよ♡
私がお口で受け止めますから、何も心配せずに
気持ちよ～くぴゅっぴゅしてくださいね♡」

「んっ、んっ、んっ、んっ……んんっ！んん～～っ……。
ん…んくっ…んくっ…ぷあっ……。」
どぴゅっ♡
ごくっ
ごくっ
びゅっ♡
びゅっ♡

「いっぱい出ましたね♡ え…？
はい、お精子はもちろんぜ～んぶ飲んでしまいました♡」
「気持ちよくお射精できましたか？
ふふっ、それはよかったです。」

「気持ちよくお射精できましたか？
ふふっ、それはよかったです。」
ニヤ
「あら？まだおちんぽ様にお精子が残っていますね。」

「あ～……んっ、れる、れる、れる…。
ちゅううううっ…。」

「……んぱっ、キレイになりましたね♡」
「またおちんぽ様が苦しくなったときは
いつでもお呼びくださいね♡」

「それでは私が膝枕をさせていただきますわ。
さ、膝の上に寝転がってください。
うふふ、いい子ですね♡」
「あら？もうおちんぽ様を
勃起させてしまったのですか？」

「え？期待しすぎて大きくなってしまった？
ふふ、可愛い♡ とても愛おしいですわ♡」
「いっぱい甘やかして差し上げますね♡」

「あ…ん…っ♡ おっぱいに夢中になっていますね♡
いっぱいちゅぱちゅぱしてくださいね♡」
ぢゅぱっ
ぢゅっ

「あっ…♡ おちんぽ様がピクピク震えています♡
興奮しているのですね。」
「うふふ…♡ おっぱいおいしいですか？
あっ…♡ やだ、私の方が気持ちよくなってしまいます♡」

「お返しに私もおちんぽ様をお慰めいたしますね♡
しこしこ、しこしこ…♡」
シコ♡
シコ♡

「おっぱいがお好きなのですか？
おちんぽ様、ガッチガチですごーく固くなってますよ♡」
「あっ…、おちんぽ様から透明なお汁が出ていますわ♡」

「いい子ですね♡
辛いことはぜーんぶ忘れて、
いっぱいいっぱい、甘えていいんですよ♡」

「あ…っ♡ タマタマさんからお精子があがってきましたよ♡
ぴゅっぴゅしそうなのですね。」

「あ…っ♡ タマタマさんからお精子があがってきましたよ♡
ぴゅっぴゅしそうなのですね。」
「いいですよ♡
私のおっぱいちゅぱちゅぱしながら、
いーっぱいぴゅっぴゅしてくださいね♡」
グッ
グッ♡

「はーい♡
ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ……。」
ビュー…ビュー…

「いっぱいぴゅっぴゅ出来ましたね♡ えらいですよ♡
気持ちよかったですか？良かった♡」
「それではお精子を流しにいきましょうか♡」

「それではお体をキレイにさせていただきますね。」
「ええ、もちろん私の手で直接洗わせていただきます。
お肌は敏感なところですから、
やさしくナデナデいたしますね♡」

「では失礼して…。
あっ…♡　逞しいお体ですね♡
すごく筋肉質で…女の体とは全然違います…♡」

「まあ…♡ あんなにお出しになったのに、
おちんぽ様がビンビンになっていますよ♡」
「タマタマさんの方から、優しくもみほぐしていきますね♡」

「もみもみ、もみもみ…。
もみもみ、もみもみ…♡」
「すごく切ないお顔をされていますね…。
タマタマさんを撫でられるのがお好きなのですね？」
もみ♡もみ♡

「あっ…すごくビクビクしてます…♡
撫でられただけでお射精してしまいそうなのですか…？
すこしお待ちになってくださいね。」
ビク♡
ビク♡

「よいしょ…っと。
胸でご奉仕させていただきますね。
おっぱい、お好きですよね？」

「うふふ、それっ…しこしこ、しこしこ…♡
しこしこ、しこしこ…♡」
「貴方様のためだけに、はしたなく育った私のおっぱいは
気持ちいいですか？うふふ、良かった♡」
もにゅ♡
もにゅん♡

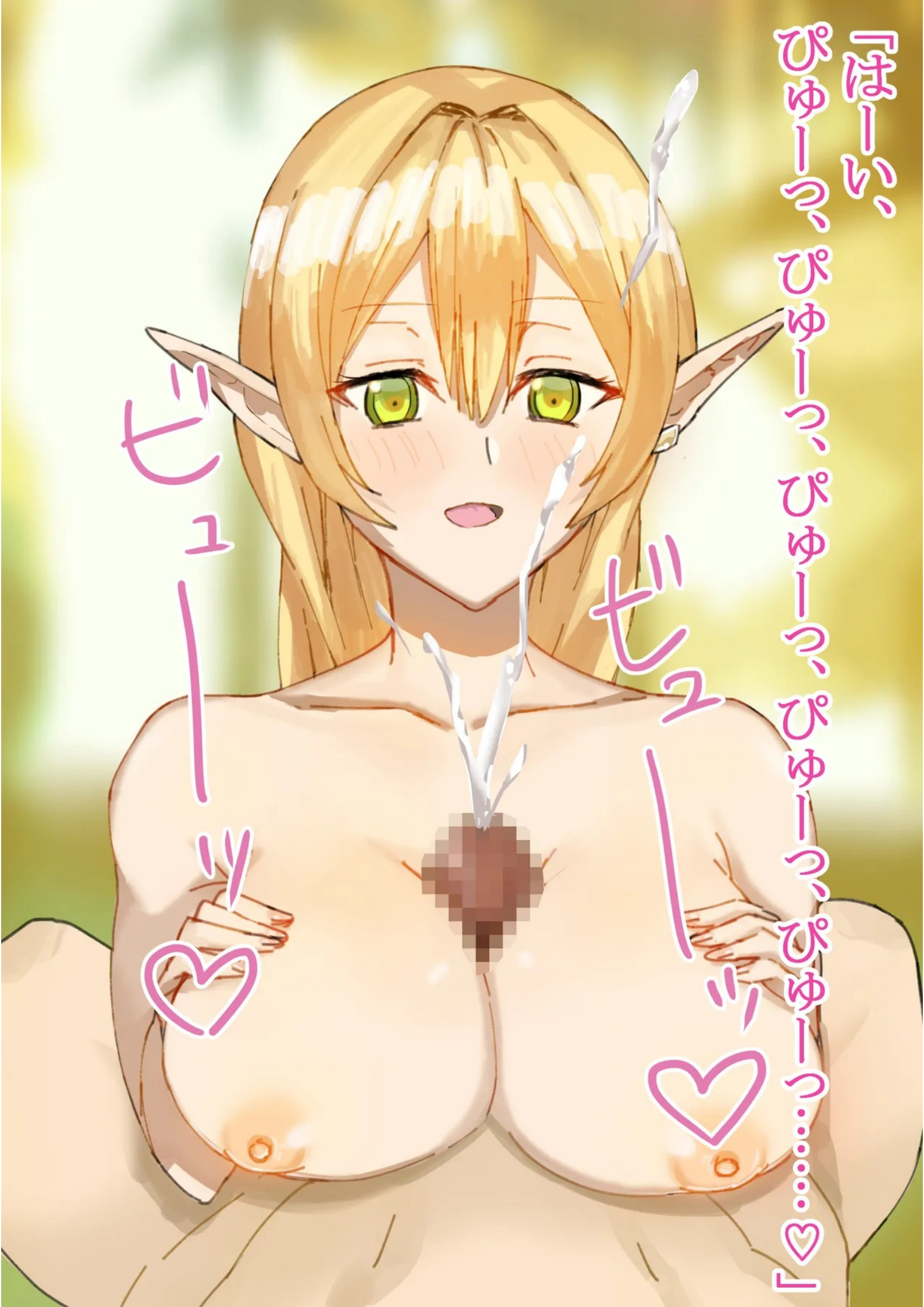
「しこしこ、しこしこ…。
先ほどから我慢されていましたから、
先っぽからお汁がどんどん溢れ出してきますわ…♡」
とろ〜…
たっぷり♡
たっぷり♡

「なんて可愛らしいおちんぽ様なのでしょう…。
私のおっぱいから亀さんがぴょっこりとお顔を出されて…♡」
「気持ちよくなーれ♡　気持ちよくなーれ♡」

「あっ…♡　すごい♡
すっごく震えていますわ♡」
ふるふる
ふるふる

「お射精してしまいそうなのですか？
いいのですよ、我慢なさらないで♡」
ふにゅ
ふにゅ
「私の体は、貴方様のためだけのものなのですから、
貴方様のなさりように、お好きに使ってください♡」

「出るんですね…♡ いっぱい出してくださいね♡」
ふるふる
ふるふる


「はーい、
ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ……♡」
ビュー
ビュー♡♡

「すごいです…♡
さっきもお射精されたばかりですのに…。」
「いっぱいお射精できて、えらいですよ♡」

え…『我慢できない』…ですか？
それは一体どういう…

あっ…。つ、つまり…
私を抱いて下さる…
ということですか…？

は…はい…。
貴方様の為に守ってきた
私の純潔、貰って下さいませ…♡

「は…はい…。貴方様の為に守ってきた私の純潔、貰って下さいませ…。」
「さぁ…私の蜜壺をお使い下さい…。」

「あっ…♡当たってます…♡」
すーり♡
すり♡

「とても固いのが…は…入って…ます…♡
これが殿方の…おちんぽ様なのですね…♡」
ビクッ…
ズプ…

「ど…どうぞ、そのまま…奥まで……んぁあああんッ！！？！」
ズプププ…
「はぁ…はぁ…だ、大丈夫ですわ…」

「すごい…中に固いのが入ってるの…
…んっ…わかり…ます…っ」
「はぁ…はぁ…あ、熱いい……っ」

「さ、私を使って気持ちよくなってください…」
「私のことは貴方様にご奉仕するためだけの雌穴だとお思いになって…」

「…う♡…んあっ♡」
「あぁっ♡きたぁ…っ♡」
キュン♡
キュン♡
メリメリ…

「あっ、あっ、あっ、あっ…♡」
「うふふ、いっぱいズポズポしてくださいね…♡」
ズンッ
パンッ♡
パンッ♡
ズンッ

「私のおまんこ、いかがですか？」
「エルフの聖巫は宝樹の守り手にご奉仕するためだけに純潔を守り続けているのです」
ハァ…♡
「つまり私は、貴方様専用おまんこなんですよ♡」
ハァ…♡

「あっ、あっ♡」
「おちんぽ様激しくなりましたっ♡」
「おちんぽ様イライラってしちゃったんですか？」
「いいですよ♡お好きに私を使って…♡」
パンッ
パンッ
パンッ

「出そうなんですか？お射精しちゃうんですか？」
「いいですよ♡いーっぱい私の膣内に出してくださいね♡」
パンッ
パンッ

「ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ、ぴゅーっ…♡
「んんっ…あぁ♡ 膣内に出てます…♡」ビュー
ビュー

「は…ぁあ…♡いっぱい出ましたね♡
おちんぽ様スッキリできましたか？」
ドクッ
ドクッ

「お疲れ様でした。いっぱいお射精できましたね♡」
ナデナデ

「さ、いっぱい頑張った良い子は
おっぱいちゅぱちゅぱしましょうね♡」
ちゅっ
ちゅぱっ

「あっ…♡
唇で乳首を挟んで、舌がすごく動いています…♡
もう、えっちな赤ちゃんでちゅね♡」
ちゅっ
ちゅぱっ

「これからは毎日、
いつでも私のおっぱいを吸っても良いのですからね」
「このセルリアは貴方様のためだけの
ご奉仕エルフなのですから…♡」
ちゅっ
ちゅぱっ